

処方の多い薬剤による糖尿病 コレステロール低下剤（スタチン剤）と男性ホルモン遮断剤

薬のチェック編集委員会

はじめに

ストレスを多く抱え、睡眠不足になり、過食になると、血圧が高くなり、コレステロール値が高くなり、胃酸過多で胸やけがし、血糖値が上がり気味、肥満気味になります。

ストレスをそのままにして睡眠不足が続き、運動もあまりしないと、健康診断で高血糖やコレステロール高値などを指摘され、受診を奨められてしまいます。高血圧に対しては136頁[1]で指摘しているように、日本高血圧学会の基準に沿って降圧剤が処方され、コレステロール値が少し高いだけでもスタチン剤が処方されます。胸やけで受診すると、胃酸抑制のためにプロトンポンプ阻害剤（PPI）が処方されるでしょう。

体は、各臓器の細胞の状態が最適な状態でその役目を果たすために、ナトリウムやカリウム、カルシウムなどのイオンや酵素、それらを受け止める受容体を働かせて調整しています。薬剤は、こうした体の基本的なイオンや酵素、受容体を刺激したり、妨害したりし

て、症状を緩和したり血糖値などの血中濃度を変化させます[2]。

しかし、体にとって基本的に重要な物質を変化させると、治療で狙った細胞だけでなく、正常に働いている他の細胞の働きを妨害して害反応が現れます。

薬剤の影響で、体にとって基本的に重要な物質の利用が妨害されると、膵臓のβ細胞の働きが妨害され、インスリンの分泌が減って高血糖になります。体の多くの細胞の働きが妨害されると、インスリンが効きにくくなって、やはり血糖値が上がります。本誌で前回取り上げた症例で、処方されていた13種類の薬剤中11種類が血糖値を上げる作用があったこと[2]が、これを物語っています。

今回は、日常診療で処方される機会が多いたチン剤と、男性のがん罹患者数が最も多い前立腺がんに用いられる男性ホルモン遮断剤による糖尿病発症例を紹介し、害反応 - 処方カスケードに陥らないための注意点を検討します。